

た。

シベリアの昼は長い。七時八時ころはまだ明るい。いよいよ収容所に帰る時刻になった。準備しておいたパンの袋を担いで工場を出た。まず衛兵にパンを与えると、何の苦もなくスイスイと通してくれた。

班内でも我々の帰りを待っていて大喜び。毎日曜日は工場も休みますが、管理人は私を自宅に招待してくれるのです。部屋には大きな地球儀が置いてあって、まずソ連邦を指差し、少し左に回して日本を指差す……「どうだね、お前たちの国はここだ」と、さもご満悦である。

食卓では黒パンとキャベツ、トマト、キュウリ等大皿に盛り上げ、ロシアスープが登場する。かつてハイラルに駐留していたころ食事に行ったレストランの定食を思い浮かべて感慨であった。時にはウスリー河周辺を四輪駆動車でドライブしてくれることもある。

あれが溥儀氏の収容所、こちらが関東軍司令官の収容所だ等、手話で説明してくれる。うそかまことかうンウンとうなずいてやった。

やがて工場の作業も市民の手に委ねることになり、私たち三人は、何だか惜しまれつつ工場を去ることになった。

その後私は、各収容所を転々と移動させられ、そのうちに新しい年を迎える日がやってきた。

春とはいっても零下何十度、作業に出る者、班内に残る者、もはや重労働でもないらしい。同志たちはようやく心身ともに落ち着き始め、夜になればお国自慢や歌も出るようになった。そのころであった、我々の作詩作曲ハバロフスク小唄が流行し、歌い始めたのだ。しかし収容所には楽器などあるわけもない。そこらにあつたうちわを集めて伴奏した記憶が残っている。

私のシベリア抑留

岩手県 田 辺 壮 久

参 戦

昭和二十年八月九日、歩兵第九十連隊第四中隊挙げ

て駐屯地アルシヤンの西南十キロの外蒙古国境に、陣地構築のため、到着して間もない午後三時「ソ連と戦闘状態に入ったので即時帰隊せよ。」との大隊長命令により、夕刻アルシヤンに帰隊、直ちに西方の伏敵山陣地の国境警備についた。翌十日駐屯地に戻り、空襲の最中軍備を整え、兵舎に火を放ち、アルシヤン南方六キロのウフルト山に移動して、戦車肉薄攻撃の壕を掘り、「第二大隊はウフルト山陣地を死守せよ。」との連隊長命令により、間近に迫ったソ連軍の大部隊を警戒しつつ決死の覚悟を固めていた。ところが、十二日夜半になり、急遽南方の白城子方面へ移動せよ、との変更命令があり、夜を徹して行動中の十三日朝、牛汾名付近において、背後からソ連軍大機甲化部隊の急襲を受けた。

我が軍は、直ちに第一線に左から第六中隊、機関銃中隊、第四中隊、大隊砲小隊が、後方には大隊砲小隊、第五中隊が展開した。

私は指揮班長として、重光第四中隊長に従い、班員八人を散開させた。午前八時ソ連軍は強力な野砲、迫

撃砲、重機関銃をもって一斉攻撃を開始してきた。我方は大隊砲、重機関銃、軽機関銃をもって応戦した。砲弾により樹木はなぎ倒され、山火事が発生し、戦場は瞬く間に修羅場と化した。

敵は大量の戦車をもって攻撃を加えてくる。自動小銃を腰に据えて多数の歩兵が迫ってきた。このとき左隣で指揮をとっていた重光中隊長が「やられた」の声とともにバツタリ倒れた。私は直ちに中隊長のそばにはせた。「右大腿部貫通」という。今度は私を狙って撃ってくる。見ると、前方十五メートルほどのシラカバ林の中から、十人くらいがかたまつて自動小銃で盛んに撃ってくる。私も小銃で応戦した。隊長に声をかけたが応答がない。伏せている私の身邊にシュッ、シュッと弾が刺さってくる。完全に私は狙われている。私はくさむらに身を移し、郷里の親族、知人の寄せ書きの日章旗を固く鉢巻に結び、ヘルメットのひもを結いなおした。「隊長殿、大隊長殿に報告してまいります。」と告げ、班員に「後方の本部まで下がれ。」と大声をかけたが、いずれも応答はなかった。私は敵を凝視し

つつ匍匐で下がった。

一〇五高地の田中大隊長に戦況について報告した。大隊長から「集結している兵員をもって本部の北東部を警戒せよ。」との命令を受け、その任についた。敵の攻撃はますます激化してきた。真下の第一線では、敵の戦車に肉薄攻撃班が繰り出され、白兵戦が展開、突撃が敢行され一大決戦場と化していた。

大隊長は撤収を伝達し、午後三時集結した三十人余りに「五叉溝陣地まで撤退すべし。」と命令、それぞれ数人ごとに飛び交う砲弾の中を全力で走っては伏せ、伏せては走り、日没大興安嶺の山中に夜営した。

翌十四日朝、大隊長、昼、秋山第五中隊長等と山中で遭遇して五叉溝のトーチカで夜営した。

十六日未明南下中の敵大機甲化部隊を突破の際、大隊長等とはぐれ、以後私は八人を率い、大興安嶺山中を彷徨、草露をなめ、野草を食べて飢えをしのぎつつ行進、途中牧第三中隊に合流してハマコーザ、泰来を経て一千キロの難行苦行を続け、約一か月後の九月十四日白城子で武装解除を受け、興安に収容された。そ

の後、十一月二十六日ボロボロに破れた戦闘時の軍服のまま、非戦闘の先着集団から、黒くよれていることからカラス部隊と呼ばれ、チチハルに集結した。

この戦闘において第二大隊は、開戦時兵員四百三十九人で戦死百五人、行方不明百六十二人、うち第四中隊は、戦闘時兵員六十六人で戦死十一人、行方不明三十二人であった。

シベリア入り

十月二十八日ソ連軍から「ダモイ東京」とせき立てられ、先に集結していた将校団に最後の編成として編入され、チチハル第一九大隊長三浦俊雄大佐の掌握下になった。

この大隊は、先に下士官兵を主体として編成して残った将校団が主力で、大佐が七人もいた。私たち下士官兵は一個中隊で二百五十人、大隊編成は千五百人であった。

準備されていた有蓋貨車二段造りに四十人ずつ押し込められた。扉は外から施錠されている。窓はない。片隅に排便用の穴が開けられていた。板の隙間からわ

ずかに明かりがもれる程度でほとんど暗い。着剣した歩哨が常時監視している。もはやこうなつては、運を天に任せるよりほかはない。

満州里で重病人を下車させて国境を越えた。泰来から白城子に向かつて行動していた九月初め、満人から「戦争は終わった。日本の兵隊はウラジオストクから帰るため列車で北へ移動している。」と聞かされていたし、また興安に収容されていたとき、ソ連側から大連かウラジオから帰国と聞かされていたので、満州里から一たんシベリアに入ることは一応覚悟はしていた。国境を越えシベリア入りすると、未だ十一月初めというのに、荒野は雪一面に覆われており、異常な寒波であった。

厳しい警戒と異国入りに戦慄を覚え、隙間をのぞき進行方向確認に懸命となった。

それでも当然シベリア鉄道とカリムスカヤ駅で交差して東へ進むものと思っていた。

やがてカリムスカヤらしき駅に着いても、我々の乗った貨車は、左へ、西方に進んでいるように思われて

ならない。貨車内は騒然としてきた。「おかしい」「方向が間違っている」「そのうち向きが変わるさ」いろいろの声が聞こえる。騒いでも施錠はされているし警戒は厳しい。逃れる方途はもはや皆無である。

それまで停まっては走り、走っては停まり、むしろ停車の方が多かった輸送貨車は、急にスピードを増し、西へ西へと猛スピードで走り続けた。

一日一回のスープ配給の停車があった。車内の穴の排便では満足できないので、この停車が排便の好機であった。ところが、このとき悲劇が起きた。日本人は物陰での排便を習慣としている。貨車からやや離れ木陰にしゃがんだのを逃亡と見られたのである。監視兵の言葉は通じない。銃が発射され、酷寒の荒野でシベリアの最初の犠牲者が出たのである。これまで、たびたび威嚇はあったが、ついに現実となり、大騒ぎとなった。その後、犠牲者が出て、監視はますます厳しくなった。

数日して寒村の小駅に停車した。「下車」の合い図で五十両の長い貨車から一斉におりた。ノボパプロフ

カ駅であることは後になって知った。装備のない隊列は実に弱々しいものである。未だ夜は明けきっていない。近くの建物から赤旗がなびいていた。十一月七日の革命記念日であった。

ノボパプロフカ收容所

ノボパプロフカ駅から前後を銃剣、自動小銃の監視兵に厳重警戒されながら、ダワイ、ピストリー（急いで歩け）と急ぎ立てられながら深い雪道を山奥へ歩いたところでストイ（とまれ）となった。四キロ地点といわれたところである。周囲は三重に有刺鉄線で張りめぐらされ、凶暴なシベリア犬がつながれ、四隅に高い監視塔があり、自動小銃を抱えた監視兵が四六時中監視している。

山を掘って丸太を組み立てた半地下式掘った小屋に三十人ずつ押し込められた。中央に狭い土間の通路があり、両側に丸太がゴロゴロ並べられている。窓はなく真つ暗である。

満州から携行したものは、毛布一枚と飯盒だけである。丸太の上に毛布を敷き、枕元に飯盒を置いてお

おのの寝場所をつくった。

ここはかつてロシア人受刑者の強制收容所だったという。早速翌日から伐採作業である。旧四中隊の浅井少尉が作業中隊長、旧二大隊本部の石川曹長と私が作業中隊となり、ソ連側から毎日作業命令を受け、各隊に作業割りし、鋸、おのを貸し出し、収納をした。そのほか各隊と同様に伐採作業に従事した。

暗いうちから衛兵所前に整列して山に入り、シラカバの立木の下側をおので切りつけ、上方を長い二人用鋸で二人で引いたり押したりして切り倒すのだが、初めて見る鋸で二人の呼吸が合わず、ノルマ（労働の割当標準）が上がらない。暗くなって小屋に戻り、食事をして、着のみのまま、外套も着たまま丸太の上にゴロ寝である。朝はゆで大豆が飯盒の中盒に半分と野菜のスープ、昼は黒パン一切れ三百グラム、夜は煮たコウリヤンが中盒に半分と山羊の骨のスープで、酷寒五十度の山中での伐採作業の重労働から体力を保持することは、全く不可能な食事であった。

小屋の中で採暖用にドラム缶にシラカバや松をたく

ので、室内はすすだらけで洗顔、入浴などはしないから、目と歯だけが異常に白く見えた、顔や手は真っ黒である。

この収容所以外の消息は全くわからない。我々戦争して入った兵隊は、敵国の捕虜として、働けるだけ働かされ、酷使されて帰国することもなく、この名も知らないシベリアの酷寒の地で果てるのかと、不吉な予感が漂ってきた。

十二月の末ころになって、食糧不足による栄養失調と重労働の過労によって、重病人が続出してきた。特にシラムが蔓延し、頭髮から足先まですべて体中がシラムだらけとなり、収容所が発疹チフスの猛威に襲われた。隣でコトンと音がしたので見ると、先ほどまで飯盒のスープを吸っていた仲間が飯盒を落とし、息が絶えている。昨日は右隣で、今日は左隣である。栄養失調死である。

前夜向かい側の兵隊が、食糧運搬の馬そりの後を追いかけて、奉公袋に詰めてつるしていたのが、朝、形が崩れていた。馬糞が馬鈴薯に見えたのであろう。間もなく

やせ細った補充兵の命は絶えた。赤松の皮がそっくり黒パンに見えたとし、凍った馬糞が馬鈴薯に見えてならなかった。空腹が極限に達していたのである。

舎内では毎日栄養失調と発疹チフスでバタバタと倒れ死んだ。死んだ後には、すぐにどこからか別の仲間が補充されるが、死者はあとを絶たない。収容所の整理が行われていたのである。私も発疹チフスとなり、十二日間意識不明に陥り、四十度の高熱に冒されて氷点下五十度の雪中をタモイだと叫んでは一回ついているところを、抱えこまれ、日本の軍医に「若いから助かるだろう」との注射のおかげで我れに帰った。旧軍隊から携帯した医薬品は底をつき、助かる可能性のある者のみにしか投薬しなかったと後で衛生下士官から聞き、九死に一生を得たと感謝している。四十二キロまでやせ衰えた。

死亡者の続出で二十一年二月四キロ地点が閉鎖となり、さらに奥地の十二キロ地点へ移動して、さきの将校団の収容所に入った。

収容所では年老いた佐官級の将校も朝暗いうちから

夕方暗くなるまで、下士官兵と変わることなく、伐採作業、丸太のトラック積み込み作業に狩り出されている。

早速トド松、シラカバの伐採である。ソ連側は逃亡を恐れて、狭い山に大勢張りつけて作業をさせる。山仕事には全く素人の集団なので、大木がどこへ倒れるかわからない。毎日木の下敷きになる犠牲者が出た。原始林が樹高が高く危険だから、作業間隔を広げるよう要望しても、逃亡されるとして、要望は聞いてもらえなかった。現に逃亡者が出て、搜索され銃殺され、見せしめのため、衛生所横に三人の遺体は何日も放置されていた。

私は、若い頑強な相手を選び、傾斜地の下方の木に順次切り口を入れ、上方で大きい木を倒し、その勢いで一気に数本を倒してノルマを上げるようにした。ノルマは積み上げて二人で六立方メートルであった。

靴底が破れ板を張り付けた補修なので伸縮がなく、山作業や作業現場まで四キロの往復には、ひどく難儀をした。

酷寒シベリアの山地もようやく寒気が衰え、春が訪れ始めた二十一年四月、我々下士官兵の中隊に移動命令が出て山をおりた。山へ入って半年で、病死・事故死の続出で犠牲者が多く、仲間は半分以下となり、行き先もわからないままの淋しい下山であった。

ハバロフクス収容所

満州里からの鉄路とシベリア鉄道と交差した西隣のトウリンスク駅近くの収容所で伐採作業を一か月働いた後、シベリア極東の中心地ハバロフスク市郊外の二十一分所に収容された。ここはこれまでの山の中の収容所とは異なり、大きな街の近くである。しかし、収容所は三重の有刺鉄線が張りめぐらされた一際高い監視楼から自動小銃携帯の歩哨より常時監視されることについては変わりが無い。二百メートル四方に囲まれた中に、百人収容の天幕が二十基くらいも張られ、大勢の先着者が天幕生活をしていた。

初めはアムール河畔の製材作業であった。大きな丸太をトロッコで運び、板鋸で引いたり、丸鋸で切ったりして製板する作業だが、危険極まりない。何分にも

ずぶの素人である。手や腕を失った同僚があった。

次は建築工事である。セメントと石炭穀練り合わせでつくるブロック作業、床掘り、五階建てブロック積み、モルタル練り、天上板枠づくり、同据え付け、鉄筋組み立て、壁塗り、すべて我々素人の日本兵士の作業である。図面を見てもよくわからない。ソ連の監督とは言葉が通じない。資材が不足する。それぞれの作業種ごとにノルマがあり、工程が上がらないとして残業させられることが多く、どこの収容所でも苦勞の連続であった。

食糧は依然として少なく悪く、路傍の草ヨモギやタインポポ、アカザから名の知らない草まで、飯盒でゆでて岩塩をふりかけては空腹を満たした。毒草があつて命を落とした者があり、その後は何が毒草であつたか、お互い注意し合つた。建築工事現場の足場転落事故死がたびたび発生した。

シベリア入りして二度目の冬がめぐってきたが、一向に帰国の話はなく、収容所は暗い毎日が続き、また氷点下四十度、五十度の酷寒に襲われると思うと、体

全体が震えてくる。

死亡のほとんどは、冬に発生する。酷寒と飢餓と過酷な重労働が起因した。

冬期は湿地の建築工事の床掘りと基礎工事が多かつた。土は一・五メートルも凍結している。ツルハシと金棒で掘るのだが、カチンカチンに凍結していてツルハシがはね返えされる。

ノルマは二立方メートルである。あたりの老朽古材を探し、燃やして採暖がてら凍土を溶かし、スコップで掘り上げると効率がよいが、なかなか古材は見つからない。

ノルマの達成が果たせないときは、減食となり、黒パンは軽く、スープは薄い。

ようやく作業を終えて帰ってきてても、収容所入りが大変である。入り口の歩哨は五列か十列に整列しないと人員確認ができないのである。

私らが四列で番号で人員を掌握し、報告した数と合うと目を白黒させて不思議な顔をするのだが、歩哨自らが確認し、納得しないことには、三十分でも一時間

でも寒い中を立たなければならなかった。

収容所での大便、小便が大変であった。凍結前の秋に大穴を掘った、屋根のないところに丸太を渡し、寒風吹きすさぶ中で用を足すのである。幕舎から滑る雪道を三十メートルほど小走りし、排尿便で小高くなつた氷の山を一気に駆け上がるのである。寒くて熟睡できない夜、一晩に数回の小便のときは、我慢ができず歩きながらのこともあった。

夜間突如として、貨車からの丸太おろし、石炭おろしに狩り出され、体が冷えきつて一睡もできないまま、翌日は普段と変わらない厳しいノルマが課せられた。

恐しい冬が去って暖かくなったところ、収容所に腕や足を失つた一団が入って来た。聞くと奥地の伐採作業で怪我をしたのだという。間もなく収容所からいなくなった。このころからダモイの話題が盛んになってきた。何収容所が帰つたとか、何中隊の八卦経験者が何月ダモイと言つたとか、何中隊の占師経験者が何月帰国と占つたとか、まことしやかにうわさが流れては消え消えてはまた新しく流れ、収容所じゅうに広がった。

それが一種の希望としてその月の来るのを待ち焦がれた。

そのうち、やせ細つた栄養失調の病弱者がダモイとして収容所を立ち、先の怪我の一団も帰国だったことがわかつてから、仲間同士で、絶食して栄養失調になるか製材機で腕を失うかして早く帰国した方がよいのでは、とまじめに話し合われることすらあった。

いつの間にか、旧憲兵、特務機関、警察官たちが隊内からどこかへ移動させられ、かわつて所内に各地区の収容所から集められた民主運動活動家の共産党史講習会が催されるようになった。

収容所は幕舎から自分たちで建築したれんが造り三階建てに変わり、環境は徐々に整備されてきた。三度目の冬を越し、作業にもなれノルマ達成の成績が向上して、十六地区と呼ばれるハバロフスク州で我々の収容所二十一分所は、生産者大会で生産活動模範収容所として表彰され、二十三年六月ソ連収容所関係者に見送られて、約千五百人のほとんど全員がダモイ東京としてハバロフスクを後にした。

なお、この収容所は、昭和三十一年まで最後の抑留者が生活した収容所である。

ナホトカ収容所

ダモイ東京の基地、シベリア抑留者全員の念願のナホトカ駅に下車した。

ソ連女性軍医の検査が始まった。一列に並んでズボンを下げて軍医にお尻を向けるのである。軍医は臀部をつねって右と左に振り分ける。何の区別かわからなかったが、なお労働に耐えられると認められた者が、ナホトカ湾奥の第七分所に再抑留させられたのであった。ハバロフスク生産活動模範収容所としてのダモイは、移動の口実だけだったのである。

収容所に入ると、入ソ時と変わらないおけを棒で担いでのスープ上げをしており、ハバロフスクでは食堂で個人配膳まで改善されていたのに、逆戻りの環境に驚いた。

翌日からナホトカ港の石山作業である。石山を崩して石を一輪車に載せ、海に埋め船着場を拡張する作業であった。一輪車の車は九太を輪切ったもので、年輪

の硬軟によって楕円形に変形して丸く回らない。一輪車が横に倒れて石が下方で整地中の仲間に転がり込む。金棒で石山崩しの現地からも大石が転がる。大勢が上下に重なりあつての現場なので、石の下敷きになつての犠牲者が毎日出た。

港づくりの石山現場から三百メートルくらいのところに、日本の輸送船が二、三日おきに発着して白衣の日本の看護婦の姿が見えた。

日本輸送船を目のあたりにしての犠牲者は何とも気の毒で、労働環境の拙悪からの事故ゆえに痛恨に耐えがたかった。

収容所は古い木造二段造りであり、南京虫が夜はい出て苦しめられた。

ナホトカ駅で振り分けられた一方のグループは、臀部の皮が伸びたということで、第四分所を経て帰国したとのことであった。やせて労働不向きと見られたのである。

二月ほどして建築作業に変わった。緩やかな丘を切り崩して、地下一階地上三階のアパートの建築である。

建築作業には大分熟練してきて、高所転落、感電を除いては事故死は激減した。

シベリア各地からナホトカに集結しては、港から引揚船で帰国して行くのが台地からよく見えた。先着の我々は、労働者の祖国ソ同盟の建設、ソ同盟五か年計画の達成等と、生産目標達成のスローガンを次から次と揚げさせられ、ノルマ向上を競わされながら、帰国することなく、四度目の冬を迎えた。

ソ連側は、「日本政府が引揚船の手配を満足にしないので、多くの日本人が港が凍結して帰国できないで、残留することになった。」と説明した。

シベリアの氷が解け、四度目の春が訪れ、私が隊長を勤めていた作業中隊が、生産目標を達成して生産大会で表彰されて間もなく、突如中隊全員に帰国の命令があった。

収容所の同僚千人が整列して拍手で見送る中を、日本での再会を期しながら港の第四分所へ向かった。第三、第二、第一分所を経、最後まで迷ったが、戦友名と労働歌を書きこんだセメント紙を靴の敷皮の下に隠

し、四年間のシベリア生活の貴重な記録は、発見を恐れてナホトカの砂に埋めて、待ち焦がれた引揚船第一大拓丸のタラップを上がった。昭和二十四年六月三十日であった。

途中暴風雨による日本海の大しけに遭遇して大きく迂回しながら、高熱に冒されての雪中彷徨中、四年間の抑留中夢を見続け、片時も忘れなかった舞鶴の地に、行き交う漁船の上から、岬の緑の畑に立った人々から、そして棧橋に集まった大勢の人々から大きく手を振って歓迎され、昭和二十四年七月二日力強く、立った。

昭和十九年一月大阪へ集合して満州へ入営して以来の六年間のいろいろが、走馬灯のように身体中を駆けめぐり、まぶたが熱くなつて目がうるんだ当時のことが、今もよく想い出される。

異国の地に眠る多くの犠牲者に対して、心からご冥福をお祈り申し上げます。